受賞おめでとうございます

5月27日、新井宿自治会連合会総会が開催されました。総会後、大田文化の森で開かれた懇親会では、自治会・町会役員永年在職者に対して松原区長から、退任副会長に対して渡部連合会長から、感謝状が贈呈されました。受賞者は次のとおりです。

《退任副会長》　田中　和子
《永年在職者》　影山　昭榮　大塚　昭司
中井　正浩　内田　裕三　岩井　信二郎
栗本　光男　尾崎　行雄　臼田　博信
堅田　清子　加藤　弘子　奥田　和子
澤井　涼子　小林　利男　笹井　昭
落合　松枝　柳澤　彦男　（敬称略）

闇坂　ソフトQカーで走行実験！

5月8日、山王公園で速度制御付き電気自動車ソフトQカーを使って、生活道路での適正速度を探る住民参加のワークショップが開催されました。山王の闇坂は環七の抜け道になっていて、速度制限20kmを超えて走る車が多く、歩行者、自転車が安心して通行できる道とはいえません。そこで地域住民が「闇坂をゆっくり走ろう運動」を立ち上げて、この環境を改善する取り組みを展開しています。

その活動の一つとして、人と車が共生できる都市交通システムを提言している千葉商科大学の小栗教授を招いて、走行実験が実施されました。この日、参加者は、15km・30kmの制御速度で闇坂の通りを走行して、それぞれの安全性、利便性、心地よさなどを評価しました。

大森柳本通り商店街の名称決定！

ウィロード山王

4月1日号ではお知らせできませんでしたが、新しいニックネームが「ウィロード山王」になりました。柳色のグリーンの柱が支えるおしゃれなアーケードの車道側に、福を呼ぶおまじないのついた素敵な看板がつきました。西日よけのブラインドのある商店街、お買物楽しんでください。

編集後記

3月11日、東日本を襲った巨大震災は多くの人々の命を奪い全てを一瞬にして破壊しました。また、福島原発の事故による影響は深刻です。どん底の窮地に立った被災者へ日本中、世界からも励ましが送られています。新井宿六丁目町会では町内の有志の皆さんで義援金が即刻集められました。

毎年恒例の春日神社の祭禮は自粛となりましたが一日も早い復興の思いもあり、観音通り共栄会・親和会の協力もあって、6月11日「福興観音祭り」を実施しました。将来この地域を担うであろう未来っ子達はガンバレ東北！ガンバレ日本！とエールを送りました。

また、平成23年度より山﨑三津子委員（山王三・四町目自治会）、加藤弘子委員（新井宿五丁目町会）、落合松枝委員（新井宿七丁目町会）の3名が新しく編集委員に加わりました。どうぞよろしくお願いいたします。

（河原編集委員）

新井宿特別出張所所長着任のご挨拶

6月1日付けで新井宿特別出張所長に就任しました遠藤彰です。よろしくお願いいたします。前任の落合が築いてきた皆様との絆をしっかりと引き継いでいきたいと思います。

東日本大震災による被害の大きさは私たちの想像をはるかに超え、今も大勢の方が避難生活を余儀なくされております。一方で私たちの生活では節電対応をはじめ、余震や直下型地震への備えなど、様々な不安に直面しております。このような状況の中、安全・安心のまちにしていくためには、地域の方々をはじめ、様々な人と連携を取り、心をひとつにして取り組むことが大切だと感じております。これまでも義捐金や日頃の防災訓練を通じた被災地支援やまちの防災活動に一丸となって取り組んでいただき、感謝しております。私がかつて大森まちなみ維持課で公園管理に携わった時も、まちは地域の方に見守られていることを実感しました。皆様のご協力を賜りながら、地域力を結集し、新井宿が一層すばらしいまちになるよう頑張りますのでよろしくお願いいたします。

山王三丁目東自治会会長仲喜久雄様ご逝去

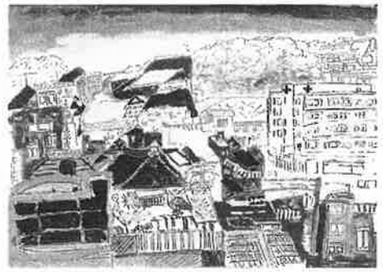
平成21年9月から山王三丁目東自治会会長として地域に力を尽くされた仲喜久雄様が、5月18日逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

発　行　地域力推進新井宿地区委員会
編　集　「わがまち新井宿」編集委員会

山王三・四丁目自治会	編集委員長	高橋 紗英子
山王三丁目東自治会	副編集委員長	荒 木 秀 樹
山王三・四丁目自治会	編集委員	山崎 三津子
山王三丁目町会	編集委員	荒 井 壽 子
中央一丁目町会	編集委員	齋 藤 蓉 子
中央四丁目町会	編集委員	若 生 一 順
新井宿五丁目町会	編集委員	加 藤 弘 子
新井宿六丁目町会	編集委員	河原 神風代
新井宿七丁目町会	編集委員	落 合 松 枝

……共同編集……
監　修　新井宿自治会連合会
事務局　大田区新井宿特別出張所
大田区中央4－31－14　☎3776－5391
http://www.city.ota.tokyo.jp/omori/index.html

わがまち Araijuku 新井宿



「街の風景」
入四小6年　中島　智希さんの作品

平成23年夏　いま、語り継ぐ新井宿での戦争体験

まもなく、66年目の終戦記念日がやってきます。

昨年の初秋、新井宿在住の方から自らの戦争体験の手記が寄稿され、編集委員会では今号での戦争体験の特集を決定し、今回、4名の方から大空襲などの生々しい戦争体験が寄せられました。

このような悲惨な戦争が再び起きないよう、大田区では、恒久平和を願って、昭和59年8月15日『平和都市宣言』を行い、以来、毎年「平和都市宣言記念事業」が実施されてきました。平和の尊さを再認識していただく一助になることを祈りつつ、この特集をお届けします。

（敬称略）

四月十五日の空襲の記憶

中央一丁目町会　田中　愛二

夜空に空襲警報の不気味な断続音が鳴り響く。ゲートルを巻き、身支度を整えていると何か前の道路の人通りが激しい。3月の下町大空襲の惨状が何となく伝えられ多くの人々が避難してゆく様子。池上の方に避難するのだろうか？

それから暫くすると、何か町がほの明るくなった気がする。裏の戸を開けて外に出ると一機のB29が爆音と共に超低空を飛び抜けて行くのを仰ぎ見る。地上の猛火を映してか真っ赤な胴体、黒い弾倉を開け放って飛んでゆくB29を呆然と見ている。ただ大きく開いた弾倉に落とす爆弾が無いらしく幾分安心して見ていたのも束の間、猛火が次第に押し寄せて来る様子。父親と隣家の様子を見に行く。近所は何か異常な静かさである。ただ火事が広がってゆくのだろうかバリバリという音が聞こえる。花屋とお隣の間に行って見ると、境のトタン塀が今にも溶けださんばかりに真っ赤である。三十間位の長い塀はすべて真っ赤な鉄の板。その向こうは火の海らしい。急いで家に戻ってバケツに井戸水を汲み、灼熱の塀に夢中で掛けるが、一瞬の内に水蒸気となって跳ね返される。その内に隣家の外壁もくすぶって来た。延焼防止に未だ燃えていない板壁に水を掛け続ける。終りには疲れ果てて家に転がりこんで横になる。

どれほど時間が経ったのだろうか、また外の様子が騒がしい。三軒先の家の二階が未だ燃えつづけているのである。近所の人々が手押しのポンプで放水中。旧式の機械で中々二階までとどかないが皆夢中で消火作業、バケツリレーの手伝い。数時間に及ぶ火との戦いが終わった。

疲労困憊して家でごろ寝。

朝、太陽の出ないうちにまた起き出して近所をまわる。裏の方は暗いが見渡す限りの焼け野原。電柱ばかりがあちこち焼け残って立っている。柱の先にチラチラと炎があがり燃え続けている。またごろ寝。次第に日が出て明るくなる。天気は快晴、道には焼けた瓦礫の山。先は何処までも見渡せる広い焼け跡。その中にただ一つ焼け残った土蔵に人々の注目が集まった。ところがお昼頃だったろうか、土蔵の瓦屋根の隙から一筋の淡い煙が立ちのぼる。「火が入った！」と見ている人々の叫び声。まもなく土蔵の屋根が抜け、火に包まれて崩れ去っていったのは瞬時の出来事だった。

これは昭和20年4月15日深夜から翌朝まで新井宿を襲った大空襲の一体験であり、当時、学徒動員の学生でもあった私の17歳の忘れえぬ記憶でもある。

▲5月25日の空襲で、田中さんのお父さんの命を救った火事頭巾

昭和18年当時
各戸に1個配給された防毒マスク
▼

「戦争」あの頃の我が町
（旧・新井宿二丁目仲町会）

山王三・四丁目自治会　田中　和子

▲蘇った薬師堂の銀杏

自治会事務局の有る薬師堂、窓を開けると今年も美しい芽吹きを見せている銀杏が目に映り、幼かった頃の思い出が蘇ってきます。子供達はこの木の下でかくれんぼ、石けり、夜の肝だめし、そしてお定まりの大喧嘩。そんな時薬師堂に住み込みの老夫婦が、何気無くご馳走してくれた、みかんの粉ジュース、水で溶かしたその味は一寸湿気臭く暖かい思いやりとともに忘れられません。

昭和18年太平洋戦争も半ばを過ぎると、表通りの商店街にも過酷な現実が待ち受けていました。線路沿いの店々は予想された空襲に備えてか強制立ち退きが命ぜられ、跡形も無く壊されて商店街は急に寂れていきました。

親類の従兄弟や友達のお父さん等、次々に戦争へと駆り出されて行きました。家でも番頭さん達に赤紙が届き、年端もいかないときから別れていた両親のいる田舎へ戻る暇も無い現地召集でした。隣り組のご近所さんも配給で品不足の中を何とか材料をかき集め、出征の時だけに配給されるするめと僅かばかりの餅米で祝いのお膳を囲み、一針毎に心を込めて縫いあげた千人針と寄せ書きで一杯になった日の丸の武運長久を胸に締め（秘め）付けて、薬師様の前で近所の皆の万歳に見送られ銀杏の木の下から出征して行ったのです。決して涙を見せてはならない心の兄達とのお別れでした。

その後、戦争の状況は日増に悪化し南方の島々の玉砕が相次ぎ、本土でも3月10日の本所・深川の大空襲は余りにも有名ですが、各地は焦土と化していました。5月29日の夜、この辺も空襲警報と共にやって来たB29の編隊による攻撃を受けて、女と子供しか残っていない街に焼夷弾がそこここに落とされた街はたちまち火の海になって行き、街中が熱く焦げ防空壕にも入っていられない程。防火用水の水を頭から浴び、立ち退きで空き地になった線路脇の側溝の中に身を伏せ、空襲の終わるのを待つしかありませんでした。消防車のサイレンが遠くに虚しく聞こえていましたが、家々は唯燃え尽きて行きました。薬師堂も焼け落ち銀杏の葉も枝も焦げてぐったりしていました。今夜から寝るところも無い皆はあてを頼って、散り散りになってしまいました。

沖縄の悲惨な状況や広島・長崎への原爆投下など詳しい事は何も知らされずでしたが、昭和20年8月15日にやっと戦争は終わりました。敗戦の悲しみより、もう空襲が無いとの安心の気持ちで満たされ、思わずまぶしい大空を見上げていました。

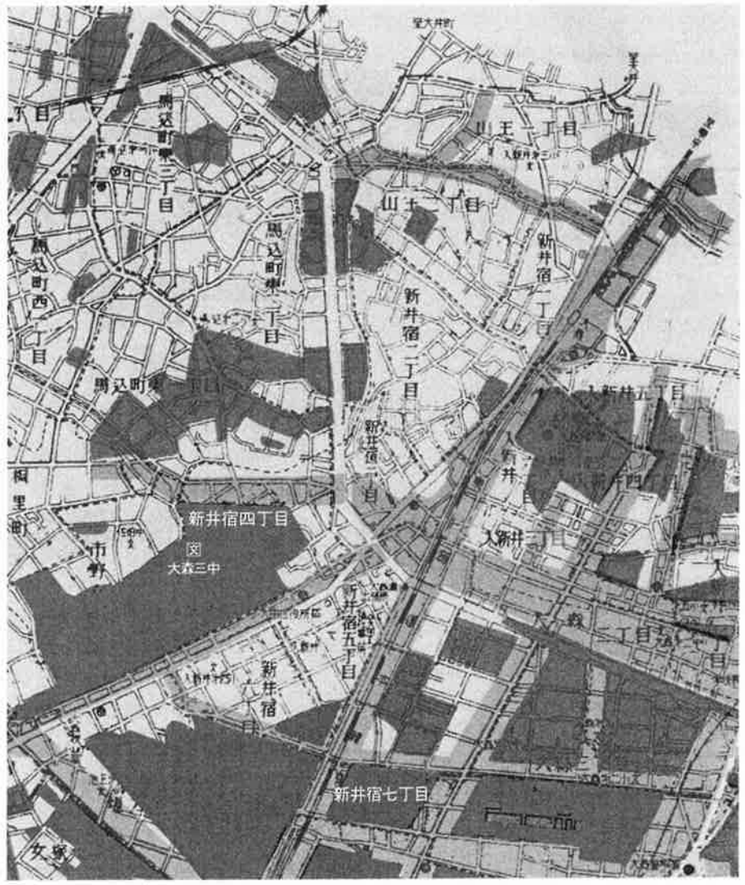
再び大森に戻った仲間が力を合わせての街づくりが始まりました。それでも長い間食べ物にも事欠き辛抱の日々が続きました。そんな中少しずつ落ち着きを取り戻した昭和27年、次の目標を薬師堂の再建と決め、努力して立派なお堂が出来たのです。もう駄目と思われた銀杏も再び蘇って枝葉も栄えて、今でもずっと私達を見守ってくれています。

明日の命もわからぬ青春

新井宿六丁目町会　福島　政子

福島さんは、新井宿6丁目で生まれ育ち、20才の時に終戦の日を迎え、その後結婚して、85年の人生をこの町でずっと過ごしてきました。平成20年まで町会の役員として40年間元気に地域のため、働いていらっしゃいました。今回、戦争の体験を伺いました。

昭和19年暮れ頃、戦火もいよいよ激しくなり、近所にあった本多牧場の牛も、一頭もいなくなりました。東海道線の線路沿は、B29の爆撃の目標になるといわれ、家々は強制疎開になり、妹たちは信州の親類を頼っていきましたが、長女である私は家のため、両親のため、明日をも知れぬ命でしたが、新井宿に残りました。



【新井宿地区の戦災地域図】

※濃い影は焼失区域、薄い影は建物強制疎開区域を表しています。
「[大田区] 戦災地域図」（昭和21年9月20日告示）より部分引用
出典：『大田区政十年』（昭和32年大田区役所発行）別冊付録
原典は、ほとんどの大田区立図書館にて閲覧が可能です。

そして町会の役員であった父親のもとで、食料の配給を手伝ったり、町内に焼夷弾が落とされると、バケツリレーで消火作業をしたりしました。家の近くに爆弾が落ちた時には、もう駄目と諦めて、馬込の川端龍子の家の方まで逃げました。「6丁目は焼けていない」という知らせを聞いて、まだ熱い土の上を自宅目指して歩きました。家は焼けずに残っていて、その時の嬉しさと安堵の気持は言葉に出せないほどでした。6丁目の町並は、焼け落ちた家、焼けずに残った家でまるで縞模様のようでした。

あの頃の社会風潮は、家が焼かれようが、夫・息子が戦死しようが、「お国のため」の一言で文句を言うこともできませんでした。戦後の食料難、近郊の農家に出かけ、物資を交換して食料をもらっても、駅の改札で検問にかかって取り上げられたり、辛い時代を乗り越えてきました。戦争は、絶対にしてはいけないことです。誰もが望んでいる平和な社会は、誰がつくるのでもなくつきつめれば、一人ひとりの賢明な行動によって築かれていくのだと思います。

思い出したくない一夜

山王三丁目町会　南雲　博康

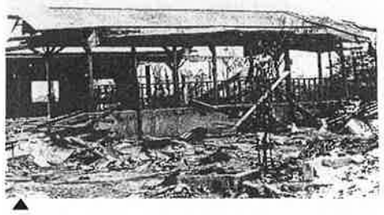
昭和20年、私は15歳、旧制中学生で学徒動員のため兵器を作る工場で毎日働いていました。当時、家族は父と私でほかの家族は、福井県の親戚に疎開をしていました。

父からは「逃げるときはこれだけは持っていくように」と言われていた、リュックサックとかばんを持って、その中には、お米とか、乾パンとか、非常食と現金とかの重要書類が積め込んでありました。

その日の夜11時過ぎ頃、警戒警報になったので、父と自転車で現在の京急・平和島駅周辺から環状七号で馬込方面に逃げました。そのうちに空襲警報が鳴り、春日橋の下は線路の上まで大勢の人と荷物で大変な様子。環七を馬込方面に向かっているうちに焼夷弾が近くに落とされ、「ワー」ときた人たちの中で荷物を道路に置き去り、道路が通れないありさまです。現在の新幹線近辺の丘に防空壕があり、そこで避難しました。

朝になって火もだいぶ治まって来たので、家の事が心配になり帰る事にしました。あれだけ大勢逃げまよっていた人々は、いったいどうなったのでしょう。春日橋から先はまだ火の海です。道路の右端に防火用水があり、体全体に水をかけてもらい火の中に向かって突っ込む人もいます。荷物をわきの下に入れてうずくまり、そして、まんじりともせずに火の勢いのおさまるのを待っている人々。家に帰ってみると家は焼け落ち、瓦礫の山になっています。ところどころから煙や火が燃えているところもありました。父も帰って来ました。近所の人たちもポツリポツリと帰り、お互いに生きている喜びを感じました。

これからの人たちに、このような思い出を作らないような世ので中が、何時までも続いてもらいたいと願っています。


▲昭和20年5月の空襲で被災した矢口の渡し駅